

多民族の物語を紡ぐ「共同実験室」

—日系三世ノブコ・ミヤモトのパフォーマンス・アート

時代を経るにつれ変化し、より複雑化していくアメリカの文化・民族的状況。それらを紡いでいこうとする日系三世ダンサーの活動は、パフォーマンスのもつ力を再確認させてくれる。



右からノブコ・ミヤモト、PJ・ヒラバヤシ（サンジョセ太鼓）、藤本容子（鼓童）の3人のコラボレーション「トライアングル・プロジェクト—タンポポの旅—」

ロサンゼルス郊外のサウスセントラル地区。静かな住宅街の一角に浄土真宗西本願寺派洗心寺がある。外からは寺とわからないが、敷地内には大きな仏壇と装飾を備えた本堂、図書室やセミナー室、日本の小学校の講堂を彷彿とさせる「ソーシャルホール」がある。中庭にはゴクラクチョウカ、フェンスの外にはヤシの木が並び、明るい陽射しとともにそこが南カリフォルニアであることを思い出させる。

リトル東京と異なり、洗心寺を訪れる日本人は多くない。檀家はロス周辺に住む日系人が大多数で、毎日曜日に法要と日曜学校、仏教の勉強会がおこなわれる。だが、寺の施設は、陶芸教室、和太鼓、雅楽舞楽など日本風の文化活動の他、各種ダンス教室、料理教室、さまざまなジャンルの音楽の練習やリハーサル、パフォーマンス・アートの稽古場としても利用され、平日の夕方や土曜日にはアフリカ系、ラティノ、ヨーロッパ系、そしてムスリムなどさまざまな民族や宗教の人びとが寺を賑わせる。洗心寺は北米和太鼓のパイオニア「緊那羅太鼓」の活動拠点でもある。

新しい「お盆ソング」

カリフォルニアの日系寺院は七月にお盆を

おこなう。洗心寺でも大きな駐車場の中心に櫓が組まれ、メインイベントの「盆おどり」がおこなわれる。そこにはあらゆる年齢層の日系人だけでなく、近所に住むアフリカ系や日頃ソーシャルホールを利用するさまざまな民族・宗教の人びとが集まり、輪になって踊る。

一九八五年、この寺から英語のお盆ソングが生まれた。なかでも「Yijo」「Garden」「音頭」などを手掛けたのは日系三世のノブコ・ミヤモトである。同じく三世の洗心寺住職マサオ・コダニ開教師が、「炭坑節」や「福島音頭」など日本の曲に加え、日系人の生活体験を反映した曲と踊りが必要と考えて制作を依頼したのだった。歌詞には日本語と英語が混じり、メロディーもミヤモト独特の感



ファンダンゴお盆 (FandangObon) の歌い手たち

性をあらかずジャンル化できないものだ。新しい振り付けと音楽は、リトル東京の日系文化会館 (JACC) 前の中庭で、他の寺からも大勢が参加して披露された。

二〇一四年一月、JACCには再び盆踊りの輪ができた。しかし今度のお盆ソングは、和太鼓や笛、三味線だけでなく、ジェンベなどを伴ったアフリカの音楽とダンス、そしてタップダンスとハラナで奏でられるチカーノ音楽と歌も含まれていた。その名も「ファンダンゴお盆」。メキシコ系の「死者の日」と「お盆」を組み合わせたイベントであった。今回の仕掛け人はノブコ・ミヤモト。「もったいない」をテーマに、わたしたちと地球と祖先あらゆる生命との関係を、人種を超えてひとつの輪になって考えようという企画だった。

ハリウッドから多文化な舞台へ

パフォーマンス・アーティストのノブコ・ミヤモトは、一九三九年にロサンゼルスで生まれた。太平洋戦争中は収容所生活を体験し、戦後にプロのダンサーとなった。映画『王様と私』『ウェストサイドストーリー』などに出演、ミュージカル『フラワー・ドラム・ソング』のリードダンサーもつとめた。しかし六〇年代末にベトナム反戦運動、黒人運動などとかかわるようになり、ニューヨークでユリ・コウチヤマらとアジア系アメリカ人運動を展開。チャリー・チン、クリス・イジマとともに、アジア系アメリカ人の体験をフォークソングにして歌い、多くの若者



BYOC (Bring Your Own Chopsticks) のビデオで、割り箸おぼけに扮するミヤモト。映像は Youtube で見ることができる

を運動へと導いた。

アジア系アメリカ人アーティスト・カンパニーとして一九七三年にグレートリープを立ち上げたが、一九九二年のロス暴動をきっかけに、多文化な舞台を制作するようになった。9・11同時多発テロ後にはアラブ系やブラックムスリムの人びととのコラボを実現し、最近の数年間には地球環境をテーマに、音楽、踊り、歌を巧みに組み合わせた「Bring Your Own Chopsticks (マイ箸をしよう)」「Your Own Chopsticks (マイ箸をしよう)」「Mottainai (ゴミを減らそう)」「Cycles of Change (自転車に乗ろう)」といったビデオを制作している。

ミヤモトの周りにはいつもさまざまな民族・宗教、芸術ジャンルのアーティストが集まる。そこから紡ぎ出される音楽は、必ずアーティスト自身の物語が含まれている。若者の自己表現をアートのレベルまで高め、同時に他のコミュニティへとつながる気づきを促す「コラボラトリ」プロジェクトも開始から一〇年になる。まもなく喜寿を迎える彼女の活動は、まさに次世代の活動家アーティストを養成する「共同実験室」なのである。

和泉真澄

同志社大学教授